



ふちばら文庫

著・島津出水
イラスト・のびと

母ませで青龍君!

❖ 仁義なき女の闘い ❖

There are two girls who scramble for one boy. They called Seiryu, Byakko and Suzaku.
They want to get pregnant his child. Because his gene is very valuable.
Hard eros battle without humanity for conception breaks out in the educational institution.

Presented by



東悟の幼なじみで白虎の使い手。普段はおとなしくて家庭的だが、怒らせると怖い。カフェでバイトをしているせいか、マニアックなファンがついている。

首虎 秋葉

セックスしてくれないなら
このまま殴り続けるから！

私を犯せ
さもなくばお前を亡き者にする

朱雀 夏姫

四ツ神流四家のひとつ、朱雀の使い手。東悟の先輩で水泳部に所属している。正義感が強く文武両道に秀でているため、学園のマドンナ的存在でもある。

俺は、頭の中が焼き切れそうなくらい興奮する——俺を求めて、こんなにエロくなつてくれる先輩は最高だ！

「青龍、よ……っ、準備はもう良いぞ……そろそろ私を、陰茎で犯すが良い……っ」

「せつ、先輩……！」

ここまで先輩の身体をいじりまくっておきながら、俺は改めて驚き、思わず愛撫の手を止めてしまう。

先輩は快感に浸った顔で瞳を潤ませながらも、ニヤリと不敵に笑おうとした。

「お前の勃起した陰茎を……はあ、はあ……わ、私の膣に挿入して……う、中で射精してくれ……っ」

「なっ……中でッ!？」

先輩の処女をもらった挙げ句、中出しだつて!?

——ここまでの先輩の説明から判断すれば、むしろそれこそが俺に求められていること。それは分かる。理屈では分かる。

だけど、俺に向かつて腰を突き出し、淫らに誘う先輩の痴態を見つめると、我慢できずに跳ね回る俺の下半身とは裏腹に、そんなことまでしてもいいんだろうかとためらいが生じてきた。

そんな俺の理性へ完全にとどめを刺す、朱雀先輩の一言。

「中で射精して……っ、私を孕ませるが良い……私はお前の子が欲しいのだ」

「ガハ………ッ!？」

もう、止められなかった。俺は先輩を抱き起こしてロッカーに背を預けさせると、必死に自らのズボンを脱ぎ去った。

「はあっ、はあ……青龍よ……私のことは気にせず、この身体を存分に味わうが良い……」

先輩の言葉に何度もうなずきながら、水着の股間部分を横へとずらし、ギンギンになっている肉棒を、そのそば濡れた肉の割れ目に押し当てた。

「いつ、いきますよ先輩……」

「我が身はお前のものだ……構わぬぞ、青龍………うっ！ はっ、はああ……ッ!」

朱雀先輩の口から、うめき声が漏れる。よだれをしたたかせた先輩の肉壺に、俺がカチカチになった肉棒をゆつくりと挿入していったのだ。

「ふふ……青龍の陰茎がっ、私の膣の中に……うっくう……!」

明らかに痛そうなのに、先輩は自分の中に埋め込まれていく肉棒を見つめながら、嬉しそうに笑う。俺は、挿入をもっと先輩に見せつけるように、肉茎を膣奥へと侵入させた。

先輩の膣内は、奥に行くほどに熱い。そして同時に、奥がすばまっている感触。肉が、異物の侵入を拒んでいるかのようだ。

「先輩のマンコの中、熱くてすごい……！」

「うう……！ 青龍……っ、もつと奥まで来い……処女膜を突き破って……奥まで……っ」先輩が声を絞り出すのと同時に、途中までしか入っていない肉竿の先端が、ちょうどコツンと何かに突き当たった。

「これ……先輩の処女膜……！」

「遠慮なく突き破るが良い……はあっ、はあっ……奥まで来て……膣のすべてを堪能して……んはっ……良いのだぞ……」

そう言ってくれる先輩には悪いが——ここまで来て、遠慮などできるはずがない。我慢はもう、とつくに利かなくなっている。

俺は先輩の腰を両手で掴んで逃がさないようにしつつ、先輩の初めての証を貫くべく腰を突き出した。

「ぐっ……！ くっ、はあっ……！」

侵入を邪魔していた肉のリンクを、亀頭で押し退けながら進む。

「はっ……う……っ、くう、はあっ……はあっ……」

それまで余裕ぶっていた先輩の顔が、何度も苦痛に歪む。

けれど、俺は腰を止めることがなかった。カリ首の辺りから伝わる、プチプチと肉の粘膜を引き裂く感触を味わいながら、膣奥へと肉槍を埋めていく。

「ぐっ……ふ……ふふっ、破瓜の痛みが……ここまでのものとはな……っ」

苦痛に顔をしかめながらも、先輩はニヤリと笑って俺を見た。まるで、強敵に相対する武道家の表情だ。

「もう止められないですよ？」

「望むところだ青龍……っ、く……膣の一番奥まで、お前の陰茎を突き立てるが良い……うっく……」

俺は先輩に誘われるままに、引き裂いた肉の輪っかを竿の部分ですり潰しながら、腰をぐいっと突き出していった。

「うっ、はっ……！ そこだ、青龍……奥に、当たったぞ……！ はあっ、はあっ……」先輩がうめくのとほぼ同時に、亀頭がコツンと本当の行き止まりを感じて、そこで俺は腰を止めた。

「お前の陰茎を……ぐっふ……へその下につ……感じるぞ……っ、はあ……こんなにも奥まで来るのか……んくっ」

「く……っ！ 先輩のマンコヤバすぎ……！」

肉棒を無理矢理ねじ込まれた膣肉は、奥から入口にかけて俺を押し戻すように蠕動する。それでなくても、奥にいただけでギチギチと痛いくらいに締めつけられているのに、その上にこの膣のうねりも加わって、俺は早くも射精欲を誘われていた。

「ふっ……そんなに私の膣の具合は良いのか……っ」

「は、はいっ、熱くて……ぬるぬるしてて、すごいです……!」

そこで俺は、愛液の泉に迎えられたように粘ついた感触に襲われ、膣肉の熱でとろかされそうになる。

「くっ、ふうっ……ならば味わえ……っ、私の膣をつ、存分につ……はあっ」

「分かりました! 俺、朱雀先輩を犯します!」

先輩に抽送を開始するべく、膣奥に突き立てていた肉槍をずりりと引き抜く。

「あっ……! ぐ……ふくう……っ」

肉竿を途中まで引き抜くと、先輩の膣口から赤いしずくがトロリと垂れ落ちてきた。

それを見ると、あの朱雀先輩の処女を貰いたのだと改めて実感できて、俺は余計に昂ぶってくる。

「先輩!」

「く……! う、良いぞ……っ、青龍……! また奥まで貫いて……膣を擦り立てるが良い……っ」

俺はコクコクと先輩にうなずくと、まだぼぐれていないマンコの奥に、肉棒を差し入れた。

「あぐ……! うっ、ふう……っ、陰茎がっ……膣の奥まで……はああっ」



行く手を阻む膣肉を亀頭で掻き分け、最奥部にゴツンとぶつかるまで突き込む。すると、一番奥の肉壁にぶち当たったところで、肉茎が中の肉に思い切り食い締められた。

「う……………！　せ、先輩、もっと動きますよっ」

先輩のマンコが気持ち良すぎて、ゆっくりな動きを続けていられない。

「はあっ、はあっ……………構わぬぞ……………っ、お前の好きに……………っ、はぐ……………っ！」

先輩が言い終わらないうちに、俺は腰を引いてまたぐっど押し出す。

朱雀先輩は油断していたのか、悲鳴に近い声を上げて、身体をビクリッと震わせた。

「くっ……………ぐ、ふぐ……………っ、はあ、はあはあ……………」

そして苦痛に顔を歪ませ、口を開けっぱなしにして息を荒げている。

けれど、膣肉の快感の虜になった俺は、我慢できずに腰を動かし続けた。

「まだまだ行きますよ先輩！」

「ああっ……………陰茎が外に……………！　膣の中の肉が……………持っていかれそうだ……………っ」

奥からズルリと引き抜くと、肉竿を食い締めていた膣肉がめくれて、外側にはみ出してくる。俺はそんな淫らな光景を見ながら、今度はズンッと腰を前に出して、硬さの残る膣肉の最奥へと入っていく。

「はああ……………！　また奥に……………っ、一番奥がっ、陰茎で叩かれて……………うくうっ」

侵入を拒む膣肉を押し分けて、俺は何度も狭い膣の奥に到達する。

押し退けられた先輩の肉は、元に戻ろうと必死に肉竿をギチギチ締めつけてきた。

あまりに強烈な締めつけと、あの朱雀先輩を犯しているという興奮に、射精衝動が容赦なく込み上げてくる。

「くう！　先輩……………」

「射精しそうならば……………いつでも良いぞ……………あ、くう……………そのまま中に、注ぎ込め……………っ」

先輩は苦悶の表情を浮かべながらも、俺をじっと見つめながら中出しを命じてきた。

「ほんとに出しますよっ……………中に！」

「はあっはあっはあっ……………遠慮はいらぬぞ……………たっぷり中に出せっ」

その言葉にさらなる昂ぶりを覚えて、俺は夢中で腰を振った。

ズリユウツと肉竿を膣から引き抜いて、ズブズブと勢い良く根元まで肉茎を突き立てる——単調なりズムの繰り返しだが、俺の体内に快感をどんどん蓄積させていく。

「ああ……………っ！　引き抜かれて……………膣の入口まで擦れる……………っ、うつくう……………一番奥に当たって……………膣がっ、満たされる……………はあっはあっ」

「うぐっ、もっ、もう出ます！」

「良いぞ青龍……………っ、ああっ、精液をこのまま……………中に……………っ！」

俺は、込み上げてくる射精衝動に従って、先輩の肉の狭間にチンポを埋め込む。

ぶちばら文庫
はら せいりゅうくん
孕ませて青龍君！

2012年 1月30日 初版第1刷 発行

■著 者 島津出水
■イラスト のぶしと
■原 作 LILITH

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©IZUMI SHIMAZU ©2012 LILITH

Printed in Japan 2012

PP038